

## 『和俗童子訓』から見る教師の役割

仙波義規

### 1. 研究のきっかけ

高等学校では、2022年度の入学生から年次進行で新学習指導要領がスタートした。新学習指導要領は、児童生徒が、何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶかということに重点が置かれている。どのように学ぶかということについては『主体的・対話的で深い学び』というキーワードに表されるように、元来の教師による一方的な教授法とは一線を画した、生徒主体の学習内容が展開されている。

文部科学省（2021）の「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協同的な学びの実現～」では、

ここでは、ICTの活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指している。さらに、これを踏まえ、各学校段階における子供の学びの姿や教職員の姿、それを支える環境について、「こうあってほしい」という願いを込め、新学習指導要領に基づいて、一人一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿を具体的に描いている。<sup>1</sup>

とされており、新学習指導要領に基づいた「ICT教育」、「個別最適な学び」、「協同的な学び」がキーワードとして、その重要性が提唱されて

---

<sup>1</sup> 文部科学省（2021年）「令和の日本型学校教育の構築を目指して」（はじめに）より引用 [https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf)（最終確認日：2023年2月16日）

いる。このような新学習指導要領のもとで学ぶ現在の子どもたちは、生まれた時から情報社会に生きている。例を挙げれば、新学習指導要領が適用された現在の高校1年生が生まれたのは2005年で、YouTube創設の年と同じである。グローバル化や人工知能、GIGAスクール構想<sup>2</sup>やSociety5.0社会に向けての取り組み、SDGsを基にした探究学習など、学校における生徒の学び方は日々変容している。このような現代は「VUCA時代<sup>3</sup>」とも呼ばれる。

このような背景から、私は学校における教師の役割について興味を抱くに至った。高等学校新学習指導要領では、「探究」という言葉が186回出てくる。<sup>4</sup>生徒の探究的な深い学びを促すために、教師として何ができるかという問いが生まれたのである。そこで私は江戸時代の人物である貝原益軒から、特に益軒が学習論・教育論について体系的にまとめた『和俗童子訓』<sup>5</sup>について深く学びたい、そこから私の問いに対する示唆を得たいと思った。益軒の著した『和俗童子訓』にみられる教師の役割から、現代の教師論について考えていきたい。

## 2. 貝原益軒という人物

高校で日本史を選択していた方でも貝原益軒をご存じない方は多いかもしれない。2023年度の高校2年生から始まる新科目『日本史探究』の教科書から益軒に関する記述を引用してみる。

一般庶民の初等教育では、都市や村々を問わずおびただしい数の寺

<sup>2</sup> GIGAスクール構想とは、Global and Innovation Gateway for Allの略である。1人1台端末をスタンダードとし、学習場面でPC端末やタブレットなどのICTを活用することで、子どもたち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育むことを目的とした取り組みのことである。

<sup>3</sup> Volatility (変動), Uncertainty (不確実), Complexity (複雑), Ambiguity (曖昧)の略で、予測不可能な時代のことを表している。

<sup>4</sup> 新学習指導要領(教科名・科目名を除く)で「探究」という語句が使用されているのは、幼稚園で11回、小学校で20回、中学校で42回なので、高等学校での186回がどれほど多いか理解できる。また、高等学校段階における探究的な学びの重要性についても感じ取ることができる。

<sup>5</sup> 貝原益軒・松田道雄訳(1974年)『大和俗訓・和俗童子訓』中央公論社。

子屋がつくられた。寺子屋は村役人・僧侶・神職・富裕な町人によって運営され、師匠（教師）がそろばんなどの日常生活に役立つことや、幕府の法、道徳などを教えた。寺子屋の師匠には浪人の武士や女性もいた。貝原益軒の著書をもとに作られた、女性の心得を説く『女大学』などを教科書として、女子教育も進められた。これらの庶民教育は、近世後期における民衆文化の発展に大きく寄与した<sup>6</sup>。

益軒が教科書に登場するのは「宝暦天明期の文化」の項目で、ここでは、益軒の著書『女大学』が世に認められ、広く女子教育を広めたという点に留められている。『和俗童子訓』は高校の教科書に出てこない。

なお、山川出版社の『高校日本史』、第一学習社の『高等学校日本史探究』、実教出版社の『日本史探究』には益軒に関する記述はなく、近現代を中心とした新科目歴史総合の教科書についても山川出版社、帝国書院ともに貝原益軒についての記載はない。

公民科目の倫理では用語集<sup>7</sup>（第Ⅲ部日本の思想 4 洋学と幕末の思想—1 洋学）に益軒に関する記載があるので引用してみる。

貝原益軒(1630～1714) 江戸時代中期の儒学者。筑前国(福岡県)黒田藩の藩医・藩儒。博学で知られた朱子学者であり、本草学(中国から伝わった薬物学で、動植物・鉱物などの効用を研究)・教育・経済・歴史など多方面に業績を残した。朱子学では一面で身分秩序を弁護する性格を持っていたが、その反面、窮理を重視する合理的・批判的な精神を持っていたので、「信ずべきを信じ、疑うべきを疑う」という実証主義的思想を育て、のちに西洋科学を受容する素地となった<sup>8</sup>。

ここでは、先ほどの女子教育を世に広めた益軒ではなく、儒学者として本草学・教育・経済・歴史など多方面に業績を残した人物として記載

<sup>6</sup> 山川出版社（2023年）『詳説日本史探究』、201頁。

<sup>7</sup> 濱井修監修・小寺聡編（2009年）『改訂版 倫理用語集』山川出版社。

<sup>8</sup> 同上、144頁。

されている。「どのようなことをした人物か」を重視する歴史科目に比べて、「どのような人物か」を重視する倫理らしい書きぶりと言える。

益軒は長い間歴史に埋もれていた。益軒を発見したのは東京高等師範学校教授三宅米吉であった<sup>9</sup>。三宅は1889年に雑誌『文』で益軒を

今日世ノ教育家ガ遵奉スル所ノ初等教育法ハ全ク外国新發明ノモノニテ我ガ国ニハ從來初等教育法ノ見ルベキモノ絶エテ無カリシ者ノ如ク思ヒナス者ナキニアラズ。是レ大ナル謬見ナリ、我ガ国ニハ欧州ニモ劣ラザル教育ノ歴史アルナリ、教授ノ主義方法ヲ論ジタルモノアルナリ。貝原益軒ノ若キハ実ニ教育ノ大家ナリ、其ノ著書ノ如キハ今日ノ教育家ノ必一読スベキ価値アルモノナリ。益軒ハ実ニ欧州教育大家ノ一人ナル英ノろつくト相似タル所多シ。…故ニ今細カニ益軒ガ教育ノ主義方法ヲ穿鑿シテ以テ我ガ教育家ノ参考ニ供ヘントス<sup>10</sup>

と、紹介している。三宅が本稿を書いた時代は、明治維新以降に欧米の教育学説が日本に入ってきて、その受容摂取に終始していた時代であった。森有礼が1871年に初代文部大臣になってから、1872年の学制はフランスの学校制度に倣ったものであったし、1879年の教育令はアメリカの制度に倣った自由主義的なものであった。1886年の学校令はドイツの国家主義的学校制度によって創られたものである。三宅が「初等教育法ハ全ク外国新發明ノモノニテ我ガ国ニハ從來初等教育法ノ見ルベキモノ絶エテ無カリシ者ノ如ク思ヒナス者ナキニアラズ。是レ大ナル謬見ナリ」というのも良く分かる。

続けて三宅は「益軒ハ実ニ欧州教育大家ノ一人ナル英ノろつくト相似タル所多シ。」と益軒とロックを重ねて評価しているのも興味深い。このロックとは、イギリスの思想家ジョン・ロックのことであり、後にいわ

<sup>9</sup> 慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会「貝原益軒の教育思想史的研究—その思想史的意義と今日的評価をめぐって—2019年度山本ゼミ共同研究報告  
<https://web.flet.keio.ac.jp/~syosin/2019collabo.pdf> (最終確認日：2023年2月16日)

<sup>10</sup> 三宅米吉(1889年)『益軒ノ教育法』金港堂書籍。

ゆるイギリス経験論で「自由主義の父」と呼ばれた人物である。ロックの考えは、「人間の心は何も書かれていない白紙（タブラ＝ラサ）である」<sup>11</sup>という言葉に集約されている。後に記載するが、ロックと益軒の教育論は似ているところが多い。三宅が「ろつくト相似タル所多シ。」と言ったのも言い過ぎではないのである。

それでは、益軒が81歳の時に出版された『和俗童子訓』から、益軒の教育論・学習論に関する記述を見ていきたい。和俗童子訓は全5巻からなる合巻で、概要は第1巻が総論上、第2巻が総論下、第3巻が随年教法・読書法、第4巻が手習法、第5巻が教女子法となっている。

本稿では『和俗童子訓』の中から(1)予めする教育、(2)よい師を手本にする、(3)志を立てること、(4)女子の教育（研究発表では上記1～3に焦点を当てて発表した）、日本史教科書の記述を見ていると、和俗童子訓のエッセンスとして女子教育にも触れておくことが良いと考えたため追加した。）、この4点に注目をして、教師の役割を考えたい。

### 3. 『和俗童子訓』に見る益軒の教育論

#### (1) 「<sup>あらかじ</sup>予めする」教育

まずは、「あらかじめする」ということから見ていきたい。人はどのように成長していくのだろうか。子どもはどのように学び、人格を形成していくか、益軒の言葉から引用する。

およそ人は善悪にかかわらず、何も分からない小さい時から習うと先に入ったことが先入主になって、すでにその性質となってしまう、あとでまた善いこと、悪いことを見聞きしても、かわりにくいから、小さい時から早く善い人に近づけ、善い道を教えるべきである。<sup>12</sup>

<sup>11</sup> ロック・服部知文訳（1967年）『教育に関する考察』岩波文庫、333頁。

<sup>12</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、207頁。

もし教えることが遅くなって、悪いことを多く見習い、聞き習い、くせになって、よくないことがでてきたあとで教え戒めても、はじめから心にしみこんだ悪いことが、心の中で早くも主となってしまっているから、あらためて善にかわりにくい。<sup>13</sup>

教えは、予めするのを先とする。予めとは、かねてよりという意味で、子どもがまだ悪にうつらない先に前もって教えるのをいう。早く教えないでおいて悪いことに染まり、習慣になった後からでは教えても善にならない。<sup>14</sup>

悪いことも幼時に早く戒めればとれやすい。悪いことは年が大きくなってからはとれない。<sup>15</sup>

人間は幼い時に入ったことが先入主になって性質に習慣になる。教えることが遅くなってしまうと、後から悪を善にするのは簡単なことではないという。なので、益軒は「子どもが悪に染まる前に善い人に近づけ、善い道を教え」なければならないとしているのである。「悪いことは年が大きくなってからはとれない」という言葉から、予めする教育の重要性・緊急性が垣間見られる。

先述したロックは『教育に関する考察』の中で「人間の幸・不幸は各自の作り出したことです。われわれが出逢う人の中で、十人中九人までは、良くも悪くも有用にも無用にも、教育によってなるものといって差し支えないと思われます。」<sup>16</sup>と教育の有用性を書いている。

そして、早期教育についてロックは「影響を与えるべきものは早い時機に彼に加えられるものでなければなりません。それは彼の性質の根本的なものにまでなってしまう習慣であって、うわべだけの態度、

---

<sup>13</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、209頁。

<sup>14</sup> 同上、208頁。

<sup>15</sup> 同上、216頁。

<sup>16</sup> ロック・服部知文訳、前掲書、14頁。

繕った体裁であってはなりません。」<sup>17</sup>としている。

「予めする」という益軒の言葉と、「影響を与えるべきものは早い時機に彼らに加えられるものでなければならない」というロックの言葉は、言葉は違うが本質は同じものである。

## (2) よい師を手本とする

予めする教育の項で、「あとで善いこと、悪いことを見聞きしても、かわりにくいから、小さい時から早く善い人に近づけ、善い道を教えるべきである。」という益軒の言葉を引用した。先入主が性質になり、習慣になるのは良くも悪くも手本によるものである。

およそ子どもを教えるのには、必ず先生がないといけない。もしほかに先生がなかったならば、その父兄がみずから日々の過程を定めて本を読ませるのがよい。父兄が骨折らないと教えは行われない。<sup>18</sup>

およそ子どもを育てるのには、生まれて乳母を求める時に、必ず温和で慎み深く、忠実で言葉の少ないものを選ばないといけない。<sup>19</sup>

およそ子どもには知恵がないから、心も言葉も、万事の行動がみなそばについているものを見習い、聞き習ってそれに似せるものである。ついている者が悪いと、育てられている子もそれに似て悪くなるから人をよくえらばないといけない。<sup>20</sup>

小さい時から、昔のことを知っている温和で正しい人をえらんで師とし友とし、早く学問を勉強させ、身を修め、人を治めるいにしえの

---

<sup>17</sup> ロック・服部知文訳，前掲書，59頁。

<sup>18</sup> 貝原益軒・松田道雄訳，前掲書，251頁。

<sup>19</sup> 同上，209頁。

<sup>20</sup> 同上，212頁。

道を教えて、善を行わせ、悪を戒めるべきである。<sup>21</sup>

子どもに学問を教えるのには、はじめから人格のよい師をさがすがよい。才能や学があっても悪い師に従わせてはいけない。師は子どもの見習う手本だからである。<sup>22</sup>

子どもに教えるのは、教師・乳母・父兄問わず、誰であっても、温和で正しい人でなければならない。なぜなら、子どもには知恵がないから、良いものも悪いものも、ついている者に似るからである。手本が悪ければ子どもは悪い性質が身につき、習慣になる。そうすると、後になってからでは善に移りにくい。

教えるものの特質としては温和で慎み深く、忠実で言葉が少なく、人格がよいものと強調されている。ここで才能や学問よりも人格が強調されていることは見逃せない。子どもが身を修め、人を治め、善を行わせるためには教師の才能・学問以上に人格が問われているのである。

ロックも同じように「私が心配します大きな危険は、ただ次のものからくるのです。召使たちと他の躰の悪い子どもたちからか、あるいは子供たちの目の前で、自分自身の悪い作法でやって見せる悪い手本と、子供たちにはけっして同時に持たせたくないもの二つ—わたくしが言うのは不道德な快樂とその称揚ですが—を子どもたちに与えることによって、子供たちを台無しにするような不道德な、あるいは愚かな人々からです。」<sup>23</sup>と、子どもにかかわる者の人格の重要性を説いている。子供を台無しにするというロックの言葉は印象的な言葉である。

では、子ども悪を戒めるにはどのようにすればいいか。益軒はその叱り方、心構えも説いている。

子弟を教える時、どんなに愚かで至らず、若くても卑しくても、ひ

---

<sup>21</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、226頁。

<sup>22</sup> 同上、220頁。

<sup>23</sup> ロック・服部知文訳、前掲書、59頁。

どく怒って顔色と言葉を荒くし、悪口をいって辱めてはいけない。こうすると子弟は自分が悪いことは忘れて。父兄の戒めに腹を立て、恨み、そむいて従わないで、かえって父子・兄弟の仲も悪くなり、お互いに意思が通ぜず、恩をそこなうようになる。ただ落ち着いて厳正に、何度も繰り返してゆっくりと訓戒するのがよい。<sup>24</sup>

父母を畏れず、目上をあなどった場合は叱るべきで、許してはいけない。もし人をあなどることを許し、それを笑ってよろこぶと、子どもは善悪が分からなくなり、悪くないことだと思って、大きくなってからそのくせがやまず、子となり弟となる法を知らず、無礼で不孝・不弟となる。<sup>25</sup>

と書いており、子どもに正しくない行いがあったその時その瞬間を見逃さずに叱る重要性を説いている。現代にあるような教師がいじめに加担するようなこと<sup>26</sup>は、決してあってはならないのである。

### (3) 志を立てること

ここまで、子どもは悪に移る前に、人格の善い教師によって導くことの重要性について見てきた。では、どうすれば子どもは善悪や学問を自分事として捉えられるだろうか。そこには教師としての外的な要因しか影響を与えるものはないのだろうか。それでは、子どもは全て影響される対象にとどまることになってしまう。内的に、自発的に学ぶ子どもの心構えとして、どのようなことが大切になるだろうか。益軒はそれを「志」として表した。

<sup>24</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、237頁。

<sup>25</sup> 同上、246頁。

<sup>26</sup> 滋賀県野洲市の小学校で50代の男性教諭が特定の男子児童を「みんなでスルー（無視）しよう」と呼びかけるなど、いじめ行為に加担した事件で、市教委が謝罪した。(2022年9月29日朝日新聞)このような出来事は敏感な子どもの発育にどれほどの悪影響を与えたか分からない。

<https://www.asahi.com/articles/ASQ9Y3T4VQ9YPTJB003.html>

幼時から善を好んで行い、悪を嫌って退けることに志を専一しなければならぬ。この志がないと学問しても役に立たない。子どもたちは第一にここに志がなければならぬ。<sup>27</sup>

先生の教えを受け学問をする法は、善を好み、行うのをつねに志とすることである。学問をするのは善を行うためである。人の善見てわが身に取り入れて行い、人の義あることを聞いたら、もっともだと感じて行わなければならぬ。善を見、義を聞いても自分の心に感じないで身に取り入れて行わないならば、はなはだしく志がなく力がないと言わなければならない。志が正しいのは万事の本である。<sup>28</sup>

ここで益軒は、善を好んで行い、悪を嫌うのは子どもの志に懸かっていると説く。いくら善い師がいても、子ども自らが取り入れなければ身に入らない。学問をするのは善を行うためであるとすれば、自身を善に至らせるものは純粋な志一つなのである。

では、志をもって学問する子どもの姿勢はどのようなものであるべきか。益軒は師の教えを深く学ぶ方法として、次のように書いている。

人の弟子となって師に仕えるときは、師を尊び、敬って重んじないといけない。師を尊ばないと学問の道が立たない。師が教えを弟子に施されたら弟子はそれを手本にして習い、師に対して心も顔色もやわらかに、うやまい慎んで己の心をむなしくして自慢することなく、知っていることも知らないように、またよくできることもできないようにしてへりくだらないといけない。師からうけた教えを心に尽くして、さらに深く学ぶがよい。これが弟子たるものの師について教えを受ける法である。<sup>29</sup>

---

<sup>27</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、233頁。

<sup>28</sup> 同上、234頁。

<sup>29</sup> 同上、228頁

師は人格がよく、子弟も師を尊ぶ、この双方の効果によって、子どもは善に自ら移るのである。このことを外して教育論は語るができない。子どもは雛のように、自ら勝手に善に育つものではないのである。

#### (4) 女子教育

次に、日本史教科書に掲載があったように、益軒の女子教育の法について見ていきたい。和俗童子訓の最終巻である第5巻は女子教育の方法にすべての頁が割かれている。当時の教育の状況も知られることから、史料としても貴重なものであるといえる。

男子は外に出て、師に従い、ものを学び、友達と交わり、世上の礼法を見聞きするから親の教えだけでなく、外で見聞きすることが多い。女子はいつも家の中にいて、外に出ないから、師友にしたがって道を学び、世上の礼儀を見習ったりする方法がない。親の教えばかりで身を立てるものであるから、父母の教えを怠ってはいけない。親に教えられずに育った女は礼儀を知らない。女の道にうとく、女徳を慎まず、かつ女の仕事の稽古ができていない。これはみな父母の子どもを愛する道を知らないからである。<sup>30</sup>

年に従ってまず早く女徳を教えないといけない。女徳とは女の心の正しくて善なるをいう。およそ女はかたちより心のすぐれているのがよい。<sup>31</sup>

それでは、益軒のいう女の道、女徳とはどのようなものであろうか。益軒はそれを女の四行として、独自の考えを展開している。

---

<sup>30</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、273頁。

<sup>31</sup> 同上、274頁。

女に四行あり。一に婦徳、二に婦言、三に婦容、四に婦功。この四つは女の勤めを行うことである。婦徳とは心だてのよいのをいう。心が貞(ただ)しくきれいで、和順なのを徳とする。婦言とは言葉のよいのを言う。うそを言わず、言葉を選んで言い、ふさわしくない悪い言葉を使わない。いうべき時に言って不要なことは言わない。また人の言うことをよく聞く。婦容とはかたちのよいのをいう。無理に飾ってばかりいないけれども、女はかたちがなよやかで女らしく、装いが上品で振る舞いが端麗で、衣服もあかがついていなくてさっぱりとしているのがよい。婦功とは女の勤むべきわざである。縫物をし、糸をよりつむぎ、衣服を整え、勤めるべき仕事をいつもして、たわむれ遊んだり、笑うことを好まず、食物・飲物をむさぼらず、姑・夫・賓客にすすめる。この四つは女の職分である。<sup>32</sup>

このほか益軒は、『いつも清潔に』、『女にも学問を』、『内を治める』、『男と女の隔て』等として具体的な女教育を説いている。現代では「女性らしさ」という言葉は押し付けで、子どもたちの将来に深刻な影響を及ぼすらしい<sup>33</sup>。むしろ女徳を蔑ろにし、社会・家庭における女性の役割が崩壊した社会の方が子どもの将来に深刻な影響を及ぼすと私は思う。ジェンダー平等社会・性の多様性が唱えられる現代にあって、益軒の女子教育法は十分見直す価値のあるものであろう。

#### 4. 教師の役割

これらのことをまとめると『和俗童子訓』より、①子どもが悪を性質とし、習慣とする前に、教育により善に導くこと、②そのために重要なのは、子どもの手本である乳母や教師・父兄の人格のよさであること、③子ども自身が志を置くこと（内発的で能動的な学ぶ意欲）が学問する

<sup>32</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、277頁。

<sup>33</sup> 「女らしく...って言わないで！声を上げ始めた女性たち（2022年5月10日クロージアアップ現代）」<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4661/>  
最終閲覧日 2023年1月27日

ための前提であることが分かる。

現代を生きる子どもたちの周りに、悪を性質とし、習慣とするように誘惑するものがどれだけ多いか、容易に想像できるだろう。子どもたちは幼い頃から日々サブスクリプションでおススメされる映像を楽しみ、インターネットサイトを閲覧している。ポルノの誘惑も常に子どもたちの周囲にある。こういった環境の中で幼少期を過ごした子どもたちは、志を立てることなく、まるで人生を他人事のように毎日を浪費する。

ましてや、AIやICT化が進み、学校や家庭で、個人で学ぶ環境が整備されている現代にあって、子どもを教え導く教師の役割はより一層必要なものであろう。善に導く師がいなくて、どうして子どもたちは勝手に志を立てるだろうか。子どもの教育はそんなに甘いものではない。

本稿では教育の対象を「子ども」と称してきたが、これはいわゆる児童（小1～小6まで）を念頭に置いて、「私は高等学校で教えているから、子どもが悪いのは関係ない、知らない。」と、小学校・中学校の教師のせいにして責任逃れをするつもりはない。子どもが善を見、義を聞いて身に取り入れ、志を立てるのはいつでも起こり得ることである（益軒の論でいうと、やはりそれは早い方がいい）。

学問を自分事として捉えられる生徒は、学校を卒業してからも自分の人生を主体的なものとして捉えて生きていくことができる。私はこれが真の自立であると考えている。だとすれば、「子ども」の悪の性質・習慣を戒め、真の自立に導くこと、これがすべての教員の役割と言える。

## 結び

はじめに述べたように、グローバル社会、GIGAスクール構想、VUCA時代等、子どもたちを取り巻く環境が日々目まぐるしく変化していつていることは言うまでもない。現代の教師は「何を教えるか（もしくはどう教えるか）」に集中しがちだが、「教師自身がどう在るべきか」という視点を欠くことはできない。

益軒の教育論から、教師としての役割は、子どもを善に導き、子どもが志を立てることができるように、早くから善いことを見せて聞かせ、

子どもの手本になることだと見た。時代が変わっても教師の在り方は変わらない。教師が「善い人格を持った正しい人」であることは現代においても重要なことである。

私は今年で教員になって10年目になる。最近になって、教え子から「大阪府の教員採用試験に合格しました。」「私立の教員になります。」という嬉しい連絡があった。教え子が教師になるというのは感慨深いものがある。人生のバトンというか、不思議なつながりを感じる。子どもはいつまでも子どもではない。自身の悪い性質・習慣から真の自立をした子どもは自分の足で自分の人生を選んでいくのである。「子ども」には可能性がある。可能性を引き出すのは教育を置いて他にないだろう。

最後に、益軒の言葉をもって結びとしたい。

古い言葉に「光陰矢の如く、時節流るるが如し」とか「光陰惜しむべし。是を流水にたとふ」とある。月日が経つのは年々早くなるものである。一度過ぎてしまうと帰ってこないことは流水のようなものである。今年の今日の今は二度と帰ってこない。何もせずに怠けて日を送ることは、からだを無駄にすることである。惜しむべきことである。...少年の時は物覚えがよくて、中年以後になって数日かかることを、ただ一日、半日で覚えて死ぬまで忘れない。一生の宝となる。年をとってから後悔しないように子どもの時に時間を惜しんで努力しないといけない。こうすれば後悔がないだろう。<sup>34</sup>

[参考文献]

- 貝原益軒・松田道雄訳(1974年)『大和俗訓・和俗童子訓』中央公論社。  
ジョン・ロック著・服部知文訳(1967年)『教育に関する考察』岩波文庫。  
辻本雅史(2012年)『「学び」の復権 模倣と習熟』岩波現代文庫。

---

<sup>34</sup> 貝原益軒・松田道雄訳、前掲書、255頁。